

らぶ☆ダイエット 1

Cbiyako & Kyoichiro

久石ケイ

Kei Kuishi



エタニティ文庫

目次

らぶ☆ダイエット 1

書き下ろし番外編
これもダイエット？

らぶらぶ☆ダイエッター

世の中、可愛いかわ可愛くないか、太っているか太っていないかで人の態度は違うと思う。特に太った女性に対する男性の扱いの酷さは、可愛い女の子に対するもの以上だ。

例えば、『ブスは三日で慣れる』とか『多少ブサイクでも暗いところでヤレば同じ』だとか……実際に話しているのを聞いたことがある。

——でも、『デブだけはその気になれない』らしい。

わたしはどう見ても『その気になれない』部類のおでぶだろう。

どこまでがぼっちゃりで、どこからがおでぶかなんて境目は、その人の主観だけど、わたしは誰がどう見ても太っている。よく気を遣って『ぼっちゃりしてるだけじゃない？』などと慰めてくれる人もいるけれど、自分の体型は自分が一番よくわかっている。大台に乗ってもう何年だろう……女の体重じゃないってところまで増えてしまった現状は悲惨だ。

わたし、細井千夜子。

『細井です』って名乗るたびに『ぶっ』って、噴き出されるほどの……おでぶです。

1 おでぶも恋をする

「うっそお……」

その日は朝からサイアクだった。

寝過ごしていつもの電車に間に合わず、満員電車に押し込まれて汗だくに。会社に着いて急いでエレベーターに飛び乗ると定員オーバーのブザーが鳴る。わたしは皆の視線を集め、すぐごと降りるしかなかった。

そして今、トイレで屈んだ時にプチッとウエストの辺りで音がした。なんとスカートの中のホックがちぎれてしまったのだ。制服のベストは以前からキツかったけれど、まさかスカートが先にダメになるなんて……

「まさか……また太った？」

どうするのよ、これ以上大きい制服は特注だって言われてるのに。

入社当時は今ほど太っていなかったから、制服も大きめぐらいで済んでいたけど……年々成長し続けて、とうとうスリーサイズアップだ。

「これじゃダメだよね……酷すぎる」

トイレの鏡に映る醜く太った自分の姿に辟易する。大学まではバレーボールを続けていたから、意外と筋肉質で締まっていた。なのに就職して四年、まったく運動しなかったら、身体を覆っていた筋肉が脂肪に変わってしまった。そして体重はとうとうプラス二十キロ！　せめて背が低ければ、同じおでぶでも少しは可愛げがあったのに……一六九センチではデカくてゴツいだけ。

これまで仕事のストレスを全部、食べることで発散してきたのが悪かった。この体型じゃオシャレな服とは無縁だったから、衣服などにお金を使わない分、ついつい食べる物につき込んでしまっていた。

「ダイエットしたいけど、とりあえず今は仕事優先だよね」

ここ一年は本当に忙しすぎて、ダイエットする余裕なんてなかった。無理してダイエットすると目眩がして倒れそうになるから……仕事に支障が出ないように控えるしかなかったのだ。

なにせ去年うちの営業部に配属された新人が最悪で、わたしは下手したらふたり分の仕事をこなさなければならなかった。できないことは人に丸投げ、教えるも覚えようとしない。彼女はどうかやらウチのお偉いさんの身内らしく、誰も強く言えなかった。それに見た目も可愛らしいから、周りからはちやほやされている。可愛い子はいいなって羨ましくなってしまう。

そんなふうにも思いつつも、わたしはわたしなりに一生懸命仕事を頑張ってきた。最近ではその成果もあって、厳しい上司にそこそこ認めてもらえるようになった。そのことは嬉しいんだけど……

「いくら仕事ができても、それだけでもんなあ」

プライベートが充実していないわけではない。とりあえず前向きで脳天気な性格が幸いして、友人には恵まれているほうだ。

だけど、恋愛経験はいまだゼロ……。彼氏いない歴二十五年目を——慕進中だった。

「やだ、細井さん。そんなとこに突っ立ってないでくださいよ。ただでさえ幅があるんですから！」

長い間トイレの鏡の前のため息をついていたら、例の新人がやってきた。

皆川百合子、周りからは『ゆりちゃん』って呼ばれている。隣に並ぶのが嫌になるほどスタイル抜群だ。同じ制服姿なのに、この差はなんなの？

「いくら鏡見たって変わらないですよ。わたし、ランチに誘われてるから、早くお化粧

直して行きたいんですけどお」

相変わらずのぼっちりメイクだ。仕事もそろそろ二年目、できればお化粧よりも仕事ができるようになってくれないかな。

「ごめん、すぐにどくね」

一応わたしのほうが先輩なんだけど……なにが気に食わないのか、彼女はいつもわたしに突っかかってくる。揉めるのが嫌で言い返さないのが原因だろうか。

「今日はうちの篠崎チーフが、ご馳走してくださるんですって」

彼女は営業二班担当の事務で、直属の上司は篠崎チーフ。三十代なかばの独身でちょっと遊び人だという噂がある。仕事はできるけど、デブとブスには当たりが強いのでわたしにとっては苦手な人だ。

わたしが所属する一班の榎澤恭一郎チーフはそんな人じゃなくて本当によかった。うちの営業は担当地区によって班分けされていて、一班のチーフは各班を統括する立場にある。というわけで必然的に総合的な事務のまとめもわたしの仕事となり、二班の皆川さんのフォロワーも、わたしがすることになっている。

皆川さんはさっきまでわたしがいた場所に立ち、口紅を塗り直しながら話しかけてきた。

「細井さんったら、ウエストのホック取れたんですか？　しばらくにも食べないほう

がいいですよ。ちよつとは痩せるかもしれませんから」

「そ、そうね……」

それができるならとつくにしてるけど……でもそんなこととして倒れたら、仕事が滞ってしまふ。皆川さんが定時で帰っても、その後二時間残業なんてザラなんだから。これも外食は避けてお弁当作ってるだけマシなはずなんだけどな。

「それじゃ、お先です」

お化粧、気合い入ってるな……彼女は職場で彼氏を見つけての寿退社狙いなんだろうね。

わたしの場合、結婚どころか彼氏すらできそうにない。友達は『運命の相手がどこかにいるはず』なんて言ってるけど、生まれてこのかた一度も見かけたことがない。奇跡的に痩せでもしない限り、一生無理そうだ。

だけど、こんなわたしでも人並みに恋をする。ただ、その相手が誰かは口が裂けても言えない。もし相手に伝わりうものなら明日から会社に行けなくなってしまうから。

そう——片思いの相手は会社の同僚だった。同じ営業部なので、毎日声を聞けるし話しかけられることもある。まるで夢のような地獄……だってアイドルやヒーローならテレビ越しに応援するだけなので、わたしがおでぶだっつてバレない。だけど、わたしの憧れの人はすぐ側にいるのだから、彼の前にこの姿を晒さなきゃいけない。それも毎

日……いいかげん開き直ってはいけるけれど。

とにかく女としてパスされるのは百パーセントわかってるから、せめて人としてパスされないよう一生懸命頑張ってきた。真面目に仕事をしていれば、いつか認めてもらえるはずなのだ。

だから、頑張れる。こんなわたしでも人を好きになってもいいのかなと、少しだけ自信が持てる——でも、やっぱりこのままじゃダメだ！ 制服がはち切れそうなもの！

どうしようと思いを抱えながらフロアに戻ったわたしに、ダメ押しの実況が突きつけられた。

「うげ……」

スカートのホックを安全ピンで留めて席に戻ると、社員旅行の写真入りのファイルが届けられていた。その中の、数人で撮ったスナップ写真が目に入る。そこには目を覆うほど、巨大化したわたしが写っていた。なにこれ……わたしってこんなに太ってた？ 脳内ではもうちょっと細かったはず……。それにあれだけ一緒に写真には写らないようにと避けていたのに、わたしの隣に本城さんのすらりとした姿があった。

「ダ、ダメだ……見せられないよ。こんな写真……特に本城さんには絶対！」

そう——わたしの憧れの人は、この優しく笑う王子様のような同期の本城俊也さん。

背はそんなに高くなくて細身なので、わたしの隣にいとマツチ棒かというほど華奢に見える。もちろん本城さんは、見た目で女性を差別したりしない人だ。こんな体型のわたしでも、ちゃんと女性扱いしてくれる。

だからといって、本城さんに告白して付き合いたいか、どうこうなりたかって思っているわけじゃない。この体型だからね……とつくに諦めている。想いを伝えたりしたら優しい本城さんを困らせてしまうし、嫌われないだけで十分だ。

おでぶの恋ゴコロの行く末なんて、見えちゃってるんだから……ね。

「お、それは社員旅行の時の写真か？」

頭上から聞こえる低くて甘いバリトンの声に、思わず首筋がゾクリとした。

「な、榎澤チーフ！」

わたしは急いで写真を手で隠した。なのにチーフは無理矢理手元を覗き込もうとする。うう、距離近すぎ！ チーフからほのかに香るマリン系のコロンが鼻をくすぐる。

「す、すみません。どうぞ」

慌てて写真のファイルをチーフのほうに押しやると、榎澤チーフはわたしの斜めうしろに立ったまま、長くて骨ばった指でファイルをめくりはじめた。

バツイチでもやたらと女性にモテるのは、仕事ができるオトコマエだから無理もない。

クールで整った顔立ちに眼鏡は最強の知的コンビネーションだ。仕事面では部下にも自分にも厳しいけれど頼りになる上司。わたしは入社当時からこの人にしごかれて、人並み以上の仕事ができるようになった。

「なんだ、これ？ おまえ……また太ったのか」
「ぐっ……」

やっぱり見ればわかるよね？ それだけ酷い写真だっってことだ。

「自分の体型が嫌なら運動しろよ。いい加減なんとかしないと身体に悪いぞ」

心配してくれるのはありがたいけど、太りたくて太ってるんじゃない……なにしたらって痩せないからなにもしないんです！ いつもならそう言い返すのに今日は言い返す元気がない。だって、わたしなりにシヨックだったから……

「千夜子くん？」

チーフはわたしのことを下の名前で呼ぶ。『細井』と呼ばれるのが嫌いだと最初に言ったのを覚えてくれているのだ。

それにしてもこの人、やたらいい声をしてるんだよね。張りのある甘いバリトンで名前を呼ばれるから、ドキッとしてしまう。

「なんなら俺が通っているジムを紹介してやろうか？ おまえの場合、食生活と運動不足が原因だろ」

「わかってます……けど遠慮しておきます。ジムって泳いだりもするんですよね？ 人で前でプールとか……み、水着を着るなんて！」

水着姿を人前に晒すなんて絶対無理！ それにチーフが通ってるジムって、格好いいセレブな人が山ほどいそうで気後れしてしまう。

「そんなこと言ってられんだろう？ 泳ぐのが嫌なら歩くか走るかしてみろよ。このままじゃ病気になるぞ？」

病気って糖尿？ メタボリック症候群？ うう、あり得るかも……確かに今年の健康診断の数値はヤバくて、もう少しで再検査になるところだった。太ってる割には低血圧で驚かれたけれど、あれはちょっとでも体重減らそうと前日から食事を抜いてたからだ。

「い、今は忙しいから……決算期過ぎたら、歩きます！ 夜とか……」
「いくらなんでも夜に歩くのは危険だろ？ ただでさえうちは残業が多いんだから。もしものことがあったらどうするんだ？」

「だ、大丈夫です！」

心配してくれるのはわかるけど、チーフには太っているわたしの気持ちなんてわかるはずがない。彼は顔だけじゃなく『いいカラダしてる』ともっぱらの評判だ。学生時代は国体に出たこともある水泳選手だったというのは有名な話。社員旅行で一緒に温泉に入った男子社員達が羨ましそうに話していたんだから！

『櫛澤さんって脱いだらすごいんです、だよな。逆三角の体型で胸板も厚いし、腹筋も割れてたぜ。ありゃ女にモテるはずだよな』

わたしも脱いだらすごいんだけど、違うよね。

仕事もできる上に、顔がよくてカラダまでいいとくれば、悩みなんかひとつもないに違いない。

「おい、聞いてるのか？ 健康のためにちよつとは考えろ。食ってばっかりだとまた太るぞ」

「わ、わかってます!!」

もう、そこまで言わなくってもいいじゃない！ でもね、その口調とは裏腹に、頭に乘せられたチーフの手は、やたら温かく優しく感じた。

「チーフ、それ以上言うとセクハラになりますよ」

「……本城」

「ほ、本城さん！」

いつの間にか側まで来ていた本城さんが、ちらりと写真に目をやる。

「ああ、この間の写真ですか？」

ヤダ！ 見ないで！ その場にある自分が写った写真のすべてを消してしまいた

かった。

「見せてもらってもいいかな？」

ダメです！ おでぶなわたしが写ってる写真なんて、見ないで！

「また後で見ろよ。もう昼休みが終わる」

本城さんが手を伸ばしかけると、チーフが写真を自分のデスクへ持って行ってしまったので、見られなくて済んだ……まさかわたしが嫌がっているのを察してくれたの？

怪訝けげんそうにしながらも、本城さんは自分のデスクに戻っていった。席に着くと、ニコツと笑いかけてくれる。

ああ、やっぱり本城さんって優しい。うーん、癒いされる！ 優しい笑顔に物腰やわの柔らかなさ。さらさらの前髪にどんな女性が相手でも発揮されるフェミニスト精神。帰国子女らしいけど、どこの国にいたんだろ？ 英国とかフランスって、イメージだよな。

せめて横に並んで仕事しても恥ずかしくないようになりたいなあ……細身な彼の横には、とてもじゃないけど今のわたしは並べないもの。

「千夜子くん、今日中にこれとこれの資料を揃えて書類を作ってくれ」

午後からは皆が外回りに出払い、うちの班はわたしと櫛澤チーフだけが残ってデスクワークをしていた。

「はい。あ、これサンプルいりますよね？ 取ってきます」

「ああ、頼む」

わたしは倉庫までサンプルを取りに行くために、階段へ向かった。エレベーターを使えば速いけど、少しでも運動するために。

「あ、本城さん達だ……」

休憩用スペースにある自販機の前。本城さんと他に数人の社員が、外回りから帰ってきて一息ついていた。彼らが帰ってきたなら、早くフロアに戻らないと……営業が戻ると報告書が出される。倉庫へ急ごうとした時、彼らの話し声が聞こえてきて、わたしは咄嗟に柱の陰に隠れた。

「あー帰りたくねえなあ……営業から戻っても俺ら一班には癒しがないんだよな。二班なんて見てみる、ゆりちゃん可愛いよなあ。あれこそ癒しだよ」

癒して……会社に必要なもの必要？ 花とかお茶じゃダメなの？

「ほんとだよなあ、帰ってもしかめっ面の檜澤チーフと、デブの細井だけだぜ？」

うぐっ……陰じゃやっぱりそんな呼ばれ方してるんだ、わたし。

「だよな。けどよ、あの体型で細井っていうのは笑えるよなあ」

「おい、そんなこと言うのはやめろよ」

さすが本城さん。見てないところでもわたしの体型のことを言う他の社員を窘めてく

れた。

「なんだよ、本城。同期だからってかばうけど、おまえもアレはパスだろう？」

「そうそう、おまえだってあの細井に惚れられたらどうする？ 告白されたら付き合えるのか？」

「……………」

押し黙る本城さん……そして苦笑い。

「そうだね……いくら優しくても、人間ができていても、それはそれ、これはこれだよね。」

「だろ？ 俺だったら迷惑だったの」

「でも、細井さんはよく仕事をやってるよ。いつも前もって資料やサンプルの用意をしてくれるから、僕らも仕事しやすいよね？」

「けどよ、仕事だけじゃなく癒しが欲しい時があるんだよ……ああ、ゆりちゃん！」

「そうそう、細井じゃまったく癒されないよ、暑苦しいしさ。本城だってそう思うだろう？」

「それは、もう少し痩せたほうがいいとは思うけど……」

「だろ？」

それ以上聞いていられなくて、その場から逃げ出した。

わかってる。わかっていただけ……本城さんの口からは聞きたくなかった。

あ、ダメだ……涙が出そう。でも、こんな人目につく場所では泣きたくない。今泣いたら余計惨めだから、ここはぐっと我慢しないと。

わたしは急ぎトイレに駆け込み、水を流して嗚咽を隠した。

本城さんはそんなこと言わないって信じていたのに……。わたしは自分が思っていたよりもずっと本城さんのことが好きで、彼ならこんなわたしでも受け入れてくれるって期待してたことに気付いてしまった。

「すみません、遅くなりました」

結局、涙が収まるまで一時間ほどトイレから出られなかった。

「なにやってたんだ？ 営業に出た連中、戻ってきてまた出ていったぞ」

「そう、ですか……」

「どうした、なにかあったのか？ 熱でもあるんじゃないのか？ 顔が赤いぞ。目も……」

チーフが心配そうに声をかけてくる。ダメダメ、上司に心配かけてちゃいけないよね。「いえ、なんともありません」

今度こそ、につこり笑って席に着き、仕事に取りかかった。わたしの机の上には営業

が置いていった報告書が山積みだ。

ああもう、いつまでこうやって強がらなくちゃいけないんだろう？ 傷付いても傷付いた顔すらできない。しちゃいけないってことはないけど、弱い自分を見せたくなかった。

でも、このままずっと我慢して、好きな人ができても想いを伝えることもなく諦め続けるの？ 一生、恋愛の希望も可能性もまったくないまま過ごしていくのだろうか。

瘦せれば世界が変わるかな……せめて人を好きになっても馬鹿にされないぐらい。そう、とりあえずは学生時代ぐらいまでに戻りたい！

—— だけど、どうやって？

痩せて人生を変えようと、今まで何度もチャレンジしては失敗を繰り返してきた。

水飲みダイエットは水分を取り過ぎて浮腫んで大変だった。一日三食、リングなど特定の食品のみを摂取する単品ダイエットはすぐに飽きるし、栄養が偏って体調不良になってしまった。お腹がへっこむという下剤系の薬草茶も試したけれど、もともと快便なので下ってしまって大変だった。脂肪を燃やす系のサプリメントを飲んでも、忙しくてあまり運動できないから効果はなかった……

わたしの場合、ダイエットをはじめると細い人と違って最初は急激に体重が減るのだから、嬉しくてつい頑張ってしまう。でもすぐに体重は落ちなくなり、貧血と目眩を

起こして倒れそうになつて続けられなくなる。

学生時代は辛くて厳しい練習にも耐えられたのに、どうして食べることだけは我慢できないのだろうか。このままじゃ一生この体型のまま、誰かを好きになつても惨めな思いを繰り返すだけ……

心のどこかで、諦めていた自分がいた。ダイエットしなくちゃと思いつつも、いつだつてスイーツを山盛り買い込んでしまっている。

こんなんじゃないダメだよ……どうする、わたし？ 変わりたいよね、わたし！

2 決意のダイエット

「細井さん、悪いけどこれ急ぎなんだ。お願いしていいかな？」

他の書類を片付けているわたしの前に、見積もりをそつと差し出すのは本城さん。もちろん彼は、この間の話をわたしが立ち聞きしていたことなど知らないから、いつもの優しい王子様スマイルで接してくる。

「急ぎって何時までですか？」

わたしは平静を装って聞き返す。

「三時までなんだ。申し訳ないけど最優先でお願いできるかな？」

「わかりました……やってみます」

あと一時間半。他の書類を一旦保存して大至急で打ち込みはじめる。よく作る書類の書式はテンプレートを作つてある。今回の書類もそれを使うことで、かなり早くできさうだ。

「できました。本城さん、どうぞ」

なんとか時間内に仕上げ、プリントアウトしたものを本城さんに手渡すことができた。「さすがだね、細井さん。本当に助かったよ、ありがとう！ でもごめんね。他の仕事の手を止めさせてしまったけど、大丈夫？」

「大丈夫ですよ、このくらい」

いつもならわたしを幸せの絶頂に引き上げてくれる気遣いの言葉も、今は拷問のように思える。優しさは本物だけど、わたしみたいなおでぶには想われるだけでも迷惑なんだよね？

「よかつたら今度こそお礼にご馳走さしてくれないかな？ いつも無理ばかり言つてるから、ね？」

「そんな……仕事ですから。気を遣わないでください」

本城さんは今日みたいに無理な仕事を頼んだ後、決まってわたしを食事に誘ってくれ

る。社交辞令だとわかっていても、嬉しかった……今までは。だけど今日は悲しくなる。誘ってどうするの？ 本気にして一緒に出かけたらしたら、わたしでも変な期待をしようよ？」

所詮おでぶはおでぶ。王子様と食事に行く資格なんてないよね。

「本城、細井に奢ってたらおまえの財布がすっからかんになっちゃうぞ」

横から二班の篠崎チーフが出張ってくる。冗談で場を盛り上げているつもりなんだろうけど、言われたこっちはしっかり傷付く。笑われる人の気持ちなんて考えもせずに人をやり玉に挙げる性質の悪い人……ホントに嫌だな。

「連れて行くなら食べ放題にしないと。なあ、細井」

なんでわたしに振るの？ どう答えさせたいっていうの？

「わたし……そんなに食べませんよ」

実際、人の財布を空にするほど食べたことはない。女性にしてはよく食べるほうかもしれないけど、男性よりは少ないはずだ。

「そうか？ じゃあ、なんでそんな体型になるんだ？」

「……さあ、なんででしょうね」

「寝てる間に、知らずに食べてたりしてな、あははは！」

「だったら怖いですね」

返事が棒読みになる。むこうはジョークのつもりだろうから、こちらも笑ってやり過ぎしかなかった。どうやらわたしって、なにを言われても平気に見えるらしい。でもね、自分で太つてることを自虐ネタにするのは平気だけど、人から言われたらやっぱり傷付く。毎回毎回、心をシヨベルカーでえぐられる気分になるんだからね。

そう思いながら、ちらりと隣を見る。

やだ……本城さんまで笑ってるの？ 好きな人の反応は、さらに深く心をえぐる。

『明るいおでぶキャラ』を目指してたけれど、好きな人の前で言われるのはちよつとしんどい。

「とにかく、本城さんの財布を空にしちゃ申し訳ないので、今日のところは遠慮しておきます」

「じゃあ……また今度ね」

そう言くと、本城さんは申し訳なさそうな笑顔を残して、得意先へ向かった。

「あの、細井さん……俺もこれ急ぎなんだけど頼んでいいですか？」

そう言って書類を差し出すのは二班の黒田くん。彼は入社二年目だけど仕事ができると評判だ。彼も人の体型のことを馬鹿にしたりしないほうかな。

さつきからうしろで二班担当の皆川さんが爪を磨いて手持ち無沙汰そうになっているの

に、どうして別の班のわたしに頼んでくるの？」

「これ、皆川さんじゃ無理っぽくて。すみません！ 今日中に出不せないとまずい書類なんです。だけど僕もこれから得意先と約束があつて……お願ひできませんか？」

他の書類も今日中なんだけどなあ……。まあ、いいか。今までにもよくあつたことだしね。皆川さんは急ぎの仕事を回しても『できませんでした』と言つて平気で帰っちゃうし、難しい書類は『わからなかった』と言つて後回しだ。結局わたしがやる羽目になるのなら、最初からこつちに言つてもらつたほうが早いかな。

「いいわ、そこに置いといて。何時がリミットなの？」

「五時までには僕も戻ってきますので、それまでによろしくお願ひします！」

黒田くんはそう言い残して自分のデスクに戻ると、鞆を抱えて行つてしまった。これで今日も残業決定だ。

片付けなければならぬ書類の束を見てため息をついた後、ふと顔を上げると檜澤チーフがこつちを向いていた。

な、なに？ なにか言われるのかな？ ドギマギしていると、チーフがわたしを呼ぶ。

「な、なんでしよう？」

「もしかして今日も残業するつもりか？」

「えっと……たぶんそうなると思います」

でないとも明日の朝までの書類が間に合わない。

「今日の残業は許可できない。それまでに済みそうにない分は皆川くんに回しなさい」

「あ、はい……わかりました」

どうしたんだらう？ いつもならわたしが残業してもなにも言わないのに。もつとも、チーフが部下にだけ残業させるなんてことは滅多になく、いつも付き合つてくれている。「へえ、チーフ、今夜は残れないってことは接待が入つてるんですか？ それともデートですか？」

同じ一班の間下くんが興味津々で声をかける。けれど、チーフはそれに「ああ」とニコリともせず答えて席を立つ。先ほど内線が鳴っていたから部長からの呼び出しかな。あの言い方では特定できないけど、やっぱりデートかも。いつも厳しいチーフが認める彼女は、きつと仕事ができる素敵な人なんだろうな。隣りに立つて歩く姿もお似合いの女性のはずだ。

いつかわたしも誰かと一緒に並んで歩いても、恥ずかしくない女性になりたいな。せめてお礼の食事ぐらい素直に受けられるぐらいに——痩せたいよ。

だけど、とりあえず今は仕事だ。わたしは仕事を頼むため皆川さんの席へ向かつた。

「それじゃ皆川さん、悪いけどこの書類の打ち込みを頼んでもいいかな？」

急ぎの仕事はそのまま自分で、その代わりに一班の仕事でも難しくない数字の入力をお願いする。

「やだ、それ一班の仕事でしょ？ わたしだってやらなきゃいけない仕事があるから無理です」

その言い方にカチンときてしまった。さっきから仕事なんかしてなくせに！ わたしが今からやる仕事は、二班の仕事だ。さっきの黒田くんとの会話もチーフとの話も聞こえていたはずなのに。

「爪を磨^{みが}いてる暇があればできると思うから」

「ひどいっ！ どうしてそんなこと言うんですかっ！」

彼女の声が、急に大きくなる。その声を聞いて二班の男性社員が何人か駆けつけてきた。皆川さんの取り巻き連中ばかり……嫌な予感。

「なに？ 細井、おまえゆりちゃんを苛^{いじ}めたのか？」

「え？」

ちよっと待って。

「細井さんがあ……わたしも仕事があるのに、無理矢理自分の仕事を押しつけてくるんです」

甘えた声……それだけで男性達が自分に味方してくれることを知っているんだ。

「酷^{ひど}いな、細井そのくらい自分でやれよ。おまえ、仕事ぐらいしか取り柄^えないだろ？」

「でも、二班の急ぎの仕事を受けてるから、わたしも余裕がなくて……」

「だからと言って、ゆりちゃんに押しつけることないじゃないか！」

いや、チーフ命令で、言われたとおり皆川さんに頼んだだけなのに。

さっきわたしに仕事を振ってきた黒田くんはもういないけれど、わたし達の会話を聞いていた一班の営業は数人残っていた。だけど彼らは、にやにや笑ってこっちを見ていてるだけ。

あ、ダメだ……また泣きそう。逆^{さか}らえはもつと酷^{ひど}いこと言われるのは確実だろうな。

「わかりました。自分でやります！」

「わかればいいんだよ。少しぐらい余分に仕事したほうが瘦^やせるよ？」

わめきたいほど腹も立つけれども、これ以上なにか口にするのと泣き出しそうだった。

だからぐっと堪^{こた}え、『金輪^{こんりん}際^{さい}、あんた達の急ぎの仕事は受けなから覚悟してよね』と、心の中でだけ悪態をついた。

「細井さん、どうせデートの予定とかないでしょ？ だからずーっと仕事してればいいのよ。本城さんや黒田くんだって仕事のがなきゃ、あなたになんて話しかけたりしないんだから！」

皆川さんはわたしの耳元で、他の人には聞こえないほど小さな声でそう言った。

やめてよ、仕事のことまで引き合いに出さないで。頑張っていれば、いつか皆もわたしのことを認めてくれると思っていたのに。結局は可愛い子の味方なんだ……馬鹿らしい！悔しい……いつか見返してやりたい！

もしわたしが痩せたら……周りの反応は変わるだろうか？

もし痩せられない時は会社を辞めるくらいの覚悟でやってやるうじゃないのよ！

ダイエット——絶対やってやるんだから!!

その後のわたしは、誰ともしやべらず仕事に没頭した。その結果、時間内にすべての仕事を終わらせることができたのだった。

『はあ？ 痩せなかったら会社辞めんの、チャイコ？』

その日の夜、保育所時代からの親友、風間一子ことイッコに決意のほどを電話で伝えた。彼女とは昔からぼっちやりさん同士で気が合って、今でもずっと付き合いが続いている。

「いや、だからそのぐらいの覚悟で頑張ろうかと……」

ダイエットをはじめたことをイッコに連絡したのは、彼女が健康相談専門のくすりやさんに勤めている健康指導のプロだからだ。なによりも彼女は一昨年、見事にダイエットを成功させているのだ。

『仕事大好きなチャイコがそんなこと言い出すなんて、よっぽどだよね』

「うん、本気だよ。だから助けてほしいの。だってイッコが一番わたしの体質を理解してくれてるでしょ？」

彼女の実施したダイエット方法は、スタイルをよくするというよりも健康のための体質改善。太った原因を考えて、食事や運動、睡眠などの生活習慣を変えていくものらしい。ダイエットは身体に負担をかけるから、不健康なままでは失敗する。まずは体質改善からはじめたほうがいいらしい。実際イッコは体質を変えて体調を崩さないまま、きれいに十キロ近く痩せた。その後リバウンドもなく、以前よりも健康で肌もきれいになっている。

『やる気になったのは嬉しいけど、大丈夫なの？ 途中でやめたりしない？』

そんな素晴らしいダイエット方法があると知りながら、なぜやらなかったのか……それは少々お金がかかるからだ。天然の滋養強壮剤や漢方生薬、体質に合わせたサプリメントを使って、ダイエットに耐えられる、元気で痩せやすい身体づくりをする。それらを全部きっちり行くと、月々かなりの金額になってしまいうらしい。

イッコが痩せた時、わたしも同じ方法を！ と飛びつきかけた。だけどちょうどその頃、兄が結婚し、わたしはひとり暮らしをはじめたばかりだった。今まで実家で気楽に暮らしてきたのに、なにもかも自分でやることになり、金銭的にも精神、体力的にも

余裕がなくなってしまうのだ。思えばあのあたりから急激に体重が増えたように思う……実家で毎日食べていたお母さんのご飯はバランスの取れたありがたいものだったんだよね。

「週末の夜にでも時間取れない？　今は決算前で仕事が忙しくて、平日は無理そうなんだ」

『いいわよ、わたしも今週は珍しく日曜に休みをもらえたの。土曜は遅くなっても大丈夫よ』

「それじゃ、『あずまや』に行かない？　もしかすると遅くなっちゃうかもしれないから」

『いいよ。コータの店も……久しぶりだし』

少しだけイッコの声のトーンが下がる。『あずまや』というのは、わたし達ふたりの幼馴染、東浩太が親の代からやっている居酒屋だ。コータとわたしは親がいとこ同士だから、はとこにあたるのかな？　身内の店だという気安さがある上に、料理がとて美味しくて居心地がいいので、すっかり行きつけのお店になっている。コータは人懐っこい性格で友達も多いから、結構溜まり場みたいにもなっていた。

「ひとりで大丈夫？　仕事が終わったらすぐに行くけど」

『コータのところだから、ひとりでも大丈夫だよ。カウンターに座ってるし』

大丈夫かな？　イッコひとりで。いつもはわたしと一緒にしないとコータの店には行かないようにしてるのに。子供の頃から引つ込み思案でおとなしかったイッコ。彼女は昔からコータのことが好きだった。でも小学生の頃、告白を拒否されて以来、想いを口にはしていない。ダイエットに成功してきれいになった時も、てっきり告白するもんだと思ってたけど……やっぱりしなかったんだよね。

わかってるんだ。ダイエットしてスタイルがよくなったからと言って、すべてが解決するわけじゃないって。つまりは自己満足にすぎないのだから。それに、スタイルが変わったぐらいで相手の気持ちが変わっても嬉しくないものね。

ただ、自分に自信が持てるようになれば、一歩踏み出す勇気が湧いてくると思う。仮にもし、わたしみたいなおでぶを好きになつてくれる奇特な人がいたとする。大人

の付き合いなだから、関係を続けていけば当然のごとくえっちをすることになるだろう。だけど今のわたしには、たとえ彼氏でも男性に裸を晒すなんてこと、怖くてとてもできやしない。いくら相手がこの体型でいいと言ってくれても、自分が許せない。だから、男の人と付き合おうとは思えないのだ。

でも、もしダイエットに成功して、痩せて自分の身体に少しでも自信が持てたら……その時は食事したりお付き合いしたり、キスとかその先も大丈夫になるかなって思う。

そのためにも、とりあえずは体重を落とすこと。目標はせめて学生時代の体重……つ

まり二十キロダイエットだ。

「それでさ、イッコ。今すぐやる気満々で、すぐにでもダイエットをはじめたいんだけど……なにをすればいい？ 甘いものや間食もやめるし、できるだけ身体を動かそうとは思ってるけど」

土曜までまだ五日もある。それまでなんて待てないよ。

『うーん、たくさんありすぎて電話で説明するのは難しいよ。食事法や生活習慣で気を付けてほしいことは山ほどあるの。どうして自分は太ってしまったのか、今までダイエットに失敗した原因はなんなのか、まずはそれをちゃんと知っておかないと同じ失敗を繰り返すからね』

「わたしはお腹が空きすぎると貧血みたいになって、手が震えてさ……結局我慢できなくて食べちゃうんだよね」

『それってもしかして低血糖症状を起こしているのかもしれないわ。空腹時に起きる貧血みたいなものなんだけど、手が震えたり目眩めまいがしたりするの。食べると血糖値が上がって症状がなくなるから、身体は食べさせようとするの。その症状はちよつとしんどいわよ……長く空腹にならないように気を付けないとね』

「わたしって、そんな体質だったんだ……」

『原因に合わせて食事内容や体質改善の方法を工夫するの。それに、運動もせずに楽に

痩せようなんて考えは甘いわよ。覚悟はできてる？ 中途半端にやるなら、やめておいたほうがいいと思うわ』

「やるよ……今回は本当に本気だよ。とにかくこのまま痩せられないのなら、会社を辞めるぐらいのつもりなんだ。絶対に痩せるって、決心したんだから！」

生半可な決心じゃ無理だってわかっている。何度も失敗してきたのだから。

『ねえ、そこまでする理由を聞いてもいい？』

「もう嫌なの。好きな人ができてても付き合うどころか告白すら……ううん、側にいることさえ恥ずかしくてできないなんて。せめて、隣に並んでも平気になりたい。少しでも自分に自信が持てるようになりたい」

『チャーコはすごくいい子だよ。それはわたしが保証する。だからそこまで自分を卑下しないで』

「今の自分が許せないの……友達といる時の自分は嫌いじゃないし、バレエをしてる時の自分も好きだった。仕事をしてる自分も好きになれた。だけど、おでぶなままじゃ恋はできないの」

『そうね。自分を好きにならないと恋愛なんてできないわよね……でも、痩せても変わらないこともあるわよ？』

「それもわかってる。でも、やるって決めたから。そのために必要なことは全部続けて

みせる！」

「思わず力んで宣言したけれど、イッコの声が聞こえてこない。もしかして呆れられちゃった？」

『わかったわ。それだけ決心が固いなら今はじめ時ね。きつと、恋愛が一番ダイエットに効くと思うわ。これはわたしの個人的な感想だけど……。わたしも応援するから頑張つてね！』

「ありがとう、イッコ」

『いいのよ、これはわたしの仕事でもあるんだから。本当なら今日からはじめられるよう、指導したいけど、それは土曜にね。それまで無理しないようにやれる？』

「うん、無理しないように頑張る！」

『実を言うと、ダイエットの原理ってすごく単純で簡単なのよ』

「もう、なに言ってるのよ。ダイエットがそんなに簡単なわけじゃない」

『ホントよ。だって代謝カロリーよりも摂取カロリーを下げれば、その差の分だけ痩せるんだから』

「あ……なるほど、確かにそうだ。じゃあ、どうして失敗しちゃうの？」

『摂取カロリーを減らし続けると、身体がそれに合わせて燃費を下げる。つまりどんどん代謝が悪くなっていくのよ。そうすると少ない食事でも体重が減らなくなってしまう

うってわけ。代謝が落ちたままでは痩せにくいから、運動して代謝を上げないとダメなの。あと、急激に体重が減りすぎると身体が危険だと感じて防衛機能が作動して、リバウンドしやすくなるから気を付けてね』

「身に覚えがありすぎて、怖いよ」

『運動すると代謝は上がるけど、普段運動していない人が無理すると疲れてしまうでしょ。そうするとまた身体は食べることで体力を補おうとするから、それも気を付けなきゃだね』

「確かに疲れると食べたくなる……怖いなあ」

『だからうちのくすりやでは、生薬入りの滋養強壮剤を飲みながらのダイエットを推奨しているの。疲れもとれるし血行がよくなって代謝も免疫力も上がるから、食事を減らしてもダイエットの成功率がアップするのよ。わたしもその方法で頑張ったわ』

「確かにイッコはいつも飲んでたよね。それじゃ、お腹が空いてなくても、つい甘いものを食べたくなるのはなぜなの？」

『ストレスが溜まった時、甘いものを食べると気分がよくなるってことを身体が知っているからなのよ。それは中毒に近いもので、我慢し過ぎると反動で過食してしまうの。だから、低カロリーのものでも満足するようにきちんと食べながら、痩せやすい身体を作るのよ』

「食べて……痩せる？」

『そうよ、太りにくい低糖質なものを、しっかりと食べるの。我慢するやり方は絶対にダメ。間食してもいいからある程度の満腹感を得られる食事法でやらないと失敗するわ。甘いものも、週に一度ご褒美として食べるのはいいと思うわ。後はゆっくりよく噛んで食べることに、栄養バランスも大切よ』

「間食してもいいの？ だったらわたしにもできそう！」

『糖質の取り過ぎはもちろんダメよ。後でダイエットレシピの資料をメールするけど、糖質っていうのは炭水化物も含まれているの。その中で一番マシなのは蕎麦かな？ おすすめしないのは、ラーメンとパスタよ。パンとご飯なら、ご飯のほうがお腹の持ちもいいわ』

「ラーメンにパスタにパン、それって好きなものばかりだよ！ じゃあ、食べていいのはなんなの？」

『タンパク質は身体を作る成分だから、しっかりと取らないといけないわね。タンパク質はお肉や魚以外に大豆や納豆、それから牛乳にチーズからも取れるわ。もちろん野菜やカルシウム、ミネラルも必要よ。チャーコにあった、美味しくて満足できる低カロリーレシピを探そうね』

そのあたりは、ネットや本などいろんなもので探せそうだ。

『あと寝不足はダイエットの敵だからよく寝ること。それと運動だけど、わたしは苦手だったからジムに通ったの。チャーコは運動得意だから大丈夫だろうけど、毎日できそう？』

「それなんだけど、平日はなかなか時間がとれないんだよね。ジムって高いの？」

『わたしの通ってるジムはそんなに高くはないけど、チャーコの家からだところと遠いよね。移動の時にエレベーターに乗らず階段を使うとか、通勤時に一駅歩くとかだったら毎日できない？』

「わかった。できるだけ歩くのと、その食事療法をやってみるね」

『それじゃ、あとは食べ方だけ……』
 イッコの指導はそのまま夜遅くまで続いた……とにかく明日から本気で頑張るんだから！

3 無理は禁物

翌日から決死のダイエット作戦を開始した。

決死っていうのはちよつと大袈裟かもしれないけど、痩せられなかったら会社を辞め

るとまでイッコに言ったのだ。そのぐらいのつもりでやらなきゃ意味がないと思う。そんな情熱が空回りしてしまつて……早く痩せたい気持ちが抑え切れなかった。少しでも痩せて今の状況から、早く抜け出したかった。

昨夜は、なかなか寝つけなかったもので、野菜スープを大量に作つてみた。コンソメ少しと、ペーコンやら玉ねぎなど冷蔵庫に残つていた野菜を色々入れたので結構なボリュームになった。作りすぎた分は冷凍して、朝はそれと常備しているヨーグルトにゆでたまごと野菜サラダ。お昼用としてポットに野菜スープを入れ、お弁当箱にはゆでたまごやハムなど冷蔵庫にある糖質以外のものを詰め込んだ。それから帰りには、キャベツや納豆、鶏の胸肉、白身魚などを買ひ込んだのだ。そして夜は、具だくさんのお味噌汁にキャベツと玉子だけのお好み焼き風というメニュー。これはイッコのオススメで結構美味しかった。明日のお弁当用には、鶏胸肉の塩麹漬けを仕込んで準備は完璧だ。お米を食べなくても、工夫次第で結構美味しく食べられる上に、タンパク質は意外とお腹の持ちがいい。

だけど準備に手がかかるため、朝がせわしなかった。早起きしたけど、ウォーキングは行けずじまい。それと腹八分目っていうのはかなり辛い。イッコに言わせると、理想は六分目だそうだけど、そんなの絶対無理！わたしの場合はいままでの暴食でかなり胃が拡張してしまつてるから、胃を小さくしなきゃダメらしい。そのため、イッコに教

えてもらった食べ方に変えた。

『ゆっくりと噛んで食べることで満腹感が脳にきちんと伝わるのよ。チャージは早食いでしょ？だから満腹感が伝わるのが遅いの。おかずとご飯は別々に、汁物は最初に呑みきつてね』

その通りやつてみて驚き！噛む回数が増えてゆっくり食べられた。少ない食事で満足が得られるのだ。

ダイエットをはじめてみたら、自分が今まで食べてた物のカロリーと栄養素がとんでもないことにも気付いた。ついつい面倒くさくて、昼食は菓子パン三個とか食べていたわだし。でも菓子パンって、一個五〇〇キロカロリー以上あるものが多い。一食で一五〇〇キロカロリーを超えてしまう。それって成人女性の一日の摂取カロリーに近いよね？おまけに炭水化物ばかりで栄養バランスも悪い。

忙しくてつい食べたくなつたりしたけど、なんとか我慢して乗り切れた。おかげさまで初日から一キロマイナス。元の体重があるからだろうけど、それでも嬉しくてしょうがなかった。

決算期で仕事が忙しいこともあって、夜にも運動する時間は取れなかった。でもそのぶん階段を使つたり、帰りに少し歩いたりした。

『運動する時には、姿勢とか歩き方とかにも気を付けてね。きれいに立つ時には、無意

識に身体の筋肉を使ってるんだって」
 イッコのアドバイスに従ってみると、違いは歴然だった。しかも翌朝起きたら、身体
 のあちこちが痛かった。運動不足だったんだね、わたし。

ダイエット開始二日目。今朝も、出勤時に階段を使ってフロアに向かおうとしていた。
 わたしの所属する営業部のフロアは十五階だからそこまで上がるのは大変だけど、頑
 張る！

「もう、甘やかさないんだから」

「なにを甘やかさないんだ？」

「え？ あ、チーフ……おはようございます」

うしろから声をかけてきたのは榎澤チーフだった。

「おはよう。歩くのはいいことだが、いきなり無理するなよ」

「は、はい」

確かに、少し無謀むぼうだったかもしれない。脚はもうガクガクだ。だけどチーフもここに
 いるってことは……毎日エレベーターを使わずに上がったの？

「無理そうだったら、途中からエレベーターを使えばいい。徐々に階数を増やすほうが
 いいぞ」

そう言ってチーフは、ボンとわたしの頭を叩いて先に階段を上がっていった。

「あ、ありがとうございます」

そっか、毎日少しずつ増やせばいいんだ。もしかして、チーフってこういう運動とか
 詳しいのかな？ 元水泳選手だけあって素敵な筋肉をしていそうだと、引き締まった
 チーフのうしろ姿に思わず見惚みとれていた。

結局今日は十階で限界がきて、そこからはエレベーターを使った。

「おはよう、細井さん。あれ、どうして十階から？」

乗り込んだエレベーターには本城さんがいた。もしかして今日は朝からすごくついて
 るかも！

「おはようございます。階段で上がろうと頑張ったんですけど……今日は十階でギブ
 アップでした」

「そうなんだ、僕も最近運動不足だから、明日から歩いて上ってみようかな？」

「ほ、本城さんも？ あ、の、——」

よかつたら一緒に歩きませんか？ と言おうとした瞬間。開いたエレベーターの向か
 いのガラス窓に映った不釣り合いなふたりの姿に、その言葉は引っ込んでしまった。

「ん？ どうかした？」

「いえ、なんでもありません……今日もお仕事頑張りましたよ」

にっこり笑ってそう言うと、更衣室へ駆け込んだ。

ダメダメ、まだ一緒になんて口にするのはおこがましいよ。全然変わってないんだから……やっぱりゆっくりなんてやってられないよ、イッコ！

そうして焦った結果……無理をするなというイッコの言いつけを守らず、三食とも主食どころか、脂も肉も抜くという無謀なことをしてしまった。そしたらなんと二日目でもた一キロ、三日目でもう一キロ、トータルで三キロも減っていた。す、すごくない？この調子で続ければ、ひと月以内にマイナス十キロも夢じゃない!? と計算してしまう。四日目もまた一キロ減っていて、思わず目を疑った。急激に痩せるのはよくないってイッコが言ってたけど、嬉しくてしょうがなかった。だからわたしは失念していたんだ。イッコにあれほど無理しちゃダメだと言われていた理由を。

「よしよし、もつと頑張るぞ!!」

四日目の今日は帰りに三駅分歩いたら、さすがにへロへロだった。でも、痩せていくのが嬉しくて、明日からはもつと歩こうと考えていた。

そろそろ我慢するのがきつくなってきたけど、この調子でいけば週末までにマイナス五キロだから、まずはそこまで頑張りがかった。

「ああ、なっちゃった」

五日目の土曜日の朝、トイレでがっくりうなだれる。

数日前から少し浮腫んできていたので、そろそろ生理だなと思っていたら案の定。体重は、水分を我慢していたので五日で五キロ減を達成したけれど……朝は怠くて起きられなかった。お弁当も作れなくて、いっそのことお昼を抜いてしまっても平気な感じだ。わたしの場合、生理前はやたら食べたくなるけど、生理がくると食欲はなくなるほうなのだ。

決算期で多忙のため朝から休日出勤し、わたしも営業部の皆も忙しく走り回っていた。

「細井さん、これやっといてくれる？ 急ぎなんだ」

「あ、俺もこれお願い」

「ちょっと、ぼーっとしてないでそこ早くどいてくださいよ！」

ダメだ……今日はちよつとヤバイ……かも。

朝から体調は最悪だった。もともと量が多く、血圧も低いほうだから気を付けなきゃならなかったのに……

決算前で午後になっても仕事は途切れず、お昼もまともに食べられないまま忙しく動いていた。

ああ、だけどさつきから目眩はするし、顔も手足も冷たくなって、冷や汗まで止まらない。でもこの書類は四時までだって村井くんが言っていた。これ、追加の資料もいるか

な？ 倉庫に取りに行かなきゃ……

「あ——」

立ち上がった途端、天井が回る。目の前は真っ暗で……もしかしてこれって立ちくらみ？ ずっと健康体で、朝礼や体育祭でも倒れたりしたことなんかなかった。

——なのに、立っていられなくて身体が床に沈んでいくのがわかる。

「細井さん？」

「千夜子くん！」

男性社員の誰かの声と、それに重なるようにわたしの下の名前を呼ぶ声が間近で聞えた。

片方の声は、きつとチーフだ。わたしを『千夜子くん』て呼ぶのはあの人だけだから。でもチーフの席は随分向こうのはずなのに……そんなことを考えていたら、意識ほとんどん遠のいていった。

「ん……あつ」

気が付くと、応接室のソファに寝かされていた。頭がくらくらしてまぶたが重い。

「千夜子くん、目が覚めたのか？ どうだ、気分は悪くないか？」

「は、はい。大丈夫です」

目を開けると心配そうな檜澤チーフの顔があった。えつと……どうやってここまで？

「あの、わたしを……」

誰が運んでくれたの？ と聞こうとした瞬間、思いっきりチーフに怒鳴られた。

「馬鹿野郎っ！ なんて無茶するんだ、おまえはっ！ 真っ青な顔してぶっ倒れやがって……まさか、無理なダイエットをしてるんじゃないだろうな？」

「い、いえ、そんな無茶したつもりは……ただその、ちょっと……」

「なんだ？」

言っ正しいのだろうか？ 男の人に生理だって。

「あ、アレの日でして……」

そこまで言うとおあ、と頷かれてしまった。わかったのかな？ やっぱり奥さんがいた人だから、そういうのにも慣れてるのかな？

「ま、まあ女性の身体が周期的に不調になることはわかってるつもりだ。ならば、そんな時ぐらい体調に合わせろ。いくら忙しいからって、無理して倒れては元も子もないだろう」

ようやく口調も元に戻ったチーフは苦い顔をしながら腕を組んだ。

「すみません。あ、あの、今何時ですか？」

「五時過ぎだ」

「ええ？ あ、書類！ 村井くんが四時までにつて……」
 「あれは村井の仕事だ。あいつか、本来の担当である皆川にやらせればいい。おまえが無理することはない」

「でも、わたしは仕事ぐらいしか取り柄がないから……」

実はお昼過ぎ頃に、また嫌みを言われたのだ。本城さんに頼まれた書類を急いで作ったら、村井くんが『オレもオレも』つて……彼は二班だけど皆川さんに頼んだら間に合わないと言つて、いつもわたしに仕事を回してくる。その時も『細井さんは仕事しから大丈夫だ。それと身体がついていかないのなら、ダイエットもやめるべきだ。健康を損なつてまでやることじゃないだろう？』

「はい……すみません、ご迷惑をおかけしました」
 仕事に支障をきたしたのは、わたしの責任だ。社会人でお給料をもらっているのだから、やつてはいけないことだった。だけど……いまさらダイエットはやめられないよ。

「とにかく今日は送つていくから、支度しなさい」
 「はい？」

送つていくつて、嘘……櫛澤チーフがそんなこと言い出すなんて！

帰り支度を整えたわたしは、チーフに促されるまま、彼の車に乗り込んだ。

男の人に車で送つてもらうなんて、滅多にない。それも助手席……たまにコートや男友達の車に乗せてもらうことはあるけれど、その時はいつも後部座席だ。

「この道、右でいいのか？ それなら意外とうちと近いな」

「そう、ですか」

わたしは助手席で小さくなっていた。チーフの車は排気量の大きな三ナンバー。座席も革張りでグレードの高い内装だった。チラチラと運転席を盗み見るけれど、なんか横顔格好よすぎじゃないですか？ 助手席つてやっぱり彼女が座る場所で、そこにこんなゴツいのが乗っているだなんて……思わず気後れしていた。

今までそんな目で見たことなかったけれど、仕事中心とは違い少しリラックスした感じで運転するチーフは妙な色気があった。ハンドルを持つきれいな指先にまで、ドキリとする。

「すまないが、少し話がある……おまえの家の近くに、車を停めておく場所はあるか？」
 アパートの近くまで来ていきなりそう言われ、来客用の駐車スペースに案内したけど、車の中で話すのかな？ なんだらう、ちょっと緊張する……

「ここで話すのもなんだから、部屋に上がらせてもらいたい。無理ならどこかお茶でも

飲めるところを探すが、おまえも今日は早めに食事したほうがいいだろう？　だが、ダイエット中は外食をあまりしたくないだろうと思ってるな」

「それはそうですけど……」

「だけどいきなりわたしの部屋に？　いまだに誰も男の人を入れたことがないのに。って、いくらなんでもチーフを疑うのは失礼だよな。厳しいけど差別もセクハラ発言もない、信頼できる上司だ。それにモテるって聞いているから女性なんて選び放題だろう。部屋に上げたところで、チーフがわたしを襲うとかあり得ない。わたしなんかはその気になる男の人なんて、この世にはいないのだから。」

わたしはそう思い直し、チーフを自分の部屋に入れることにした。

車を降りて、わたしの部屋まで並んで歩く。それだけなのにやたらと緊張していた。

「あの……よかったら、チーフも一緒に夕飯をいかがですか？　簡単なものですが作ります」

今日は夜、イッコとあずまやに行く約束をしてるけど、まだ時間も早いから軽めに食べるぐらいならいいよね。作りおきの野菜スープがあるし、ご飯も冷凍してるのを温めればすぐに用意できる。ダイエットをはじめから結構料理をしているので材料にも困らない。今朝は朝食もお弁当も作らずに出勤したので、材料は余っているぐらいだ。

「いいのか？　だが、料理なんて無理しないでいいぞ」

「いえ、もう大丈夫です。送っていただいたので余計な体力を消耗せずに済みました」

この調子だとご飯の用意ぐらいいは頑張れそうだ。

「それじゃ食事をして、その後ゆっくり話をしよう」

ダイエットをはじめてから、部屋は比較的片付いている。身も心も部屋も、きちんとしたほうがいいと思っただし、寝る前のエクササイズのためにスペースを空けている。ワルムームだから、ベッドまで丸見えでちよつと落ち着かないけど……

「えっと、ど、どうぞ」

少々戸惑いながらも、チーフには部屋の真ん中に置いたローテーブルの横、ベッドと反対側に置いたクッションの席を勧めた。すると、チーフは躊躇することなくそこに腰を下ろす。やっぱり、女性の部屋に入り慣れてるのかな？

「安心しなさい。なにもしやしない。俺はおまえの上司だ。それに、今はアレの最中だろうか？　そんな時に無理矢理やる趣味はないし、そう不自由してないから」

やっぱりビクビクしてるのが態度に出ていたらしく、気を遣わせてしまった。

「いえ、あの……じゃあご飯を作ってきますので、しばらくお待ち下さい」

そうだよな……女性に不自由なんてしてないよね。もしチーフが、なんて考えてた自分が恥ずかしい。こんなにモテる人が、わたしなんかはその気になるはずがない。

それにもし今、急にそんな展開になったとしても、いろいろな意味で人前で脱げるよ